

SIGHT YAMAGUCHI

伝 統 か ら  
未 来 を 彩 る  
【 西 の 京 】  
情 報 誌  
**創 刊 号**

# 山 都 彩

2009

Vol.1

Information magazine of  
capital [Yamaguchi City]  
in the west where the future  
is colored from tradition

## 特集 1

懐かしくも  
温かい山口への  
贈り言。  
NHKアナウンサー  
「小野文恵」

## 特集 2

ひと・まち・文化・魅力探訪  
つながる！ひろがる！  
yamaguchi-ing

## Live in 山口

はじまりの場所。  
平川和明さん・十溝内健吾さん







## 特集

1

SIGHT YAMAGUCHI



■ 小野 文恵 (NHKアナウンサー)

# 懐かしくも温かい 山口への贈り言。

「ためしてガッテン」「鶴瓶の家族に乾杯」「土曜スタジオパーク」などの司会でおなじみのNHKアナウンサー小野文恵さん。明るく、テンポのいい司会ふりと、茶目っ気たっぷりのキャラクターで、NHKアナウンサーとしては異色かつ独自の地位を築いた小野さんが、NHK入局後、最初に赴任したのは、山口放送局でした。自ら「第二の故郷」と認める山口へ寄せる思いを、爆笑エピソードとともに語っていただきました。



今

の私が、全国二〇〇万人の視聴者の皆様に向けていろいろな番組をお届けできるのは、山口での五年間があったからなんです」  
開口一番、テレビで聞き慣れた小野さんの声でそう告げられ、うれしくも驚いた。

NHKアナウンサーとして、今や何本もの人気番組の司会を務めている小野文恵さん。日々、多くの人や場所と出会い、さまざまな刺激や感動に包まれているが、十数年前、初の赴任地として過ごした山口での思い出は今も鮮明でエピソードは語り尽くせないという。

「あそこで出会った人たちが、ずっと応援し、見守ってくれている……という思いが、東京に来てからの私をずっと支えてくれているんです」

社会人一年生のころの思い出は、誰にとってもほろ苦く、懐かしいもの。小野さんにとってのそれは、とりわけ強烈だった。新人時代につきものの勘違いや失敗。アナウンサーの場合、それらは画面を通して不特定多数の人々の前にさらされてしまうのだから、大変だ。

「我ながら笑ってしまう失敗続きで、それがそのまま放送され、苦情の電話が鳴りっぱなしでした」

新人時代の武勇伝は、ガッテン、山口に埋蔵されていた！

間

読まないように読まなければ……とうつぶて必死に原稿の文字を追

うあまり「今日のニュースでは小野アナのツムジしか見えなかった」と指摘されたり、ロケ地からの生中継で「これが名物の○○です」と差し出した手の平のカンニングメモまでがバッチリ画面に



映ってしまったりと、爆笑エピソードは数知れず。中でも高校野球の県予選では「打ったー、大きい、センターバック……キャッチャーフライです」という類いの珍中継を定番に……毎回数々の迷言ホームランを飛ばし続けた。地元の視聴者にとってそれは、遥か東京にいるアナウンサーが

犯すミスとはわけが違う。街でしばしば顔を見かける地元放送局のアナウンサーが「しでかした」こと……となれば、皆、黙ってはいない。抗議電話も殺到したが、その一方では、なんと、小野さんを身近に感じ、激励する応援団のような声が山口のあちこちでわき上がっていったのだ。

娘のように温かく見守り、「今度は失敗せんように(しないで)ね」と励ました。

もちろん、取材をきっかけに深めた絆も数知れず……。特に、初めて企画段階から手がけた番組で取材したやまぐち女性起業家支援塾の一期生の面々のことは、「同級生のような存在でした」と小野さん。「皆さん、女性社長の卵だったわけですが、事業を起こすために新しい切り口を模索している姿は、新米アナウンサーのわが身とも重なるような気がして……お付き合いは今も続いています。山口に新しい風を起こそうとしている、そんな情熱への共感もありましたね」

「山口に帰りたい」と泣き言を言ったら、「東京で頑張れ」って……



時

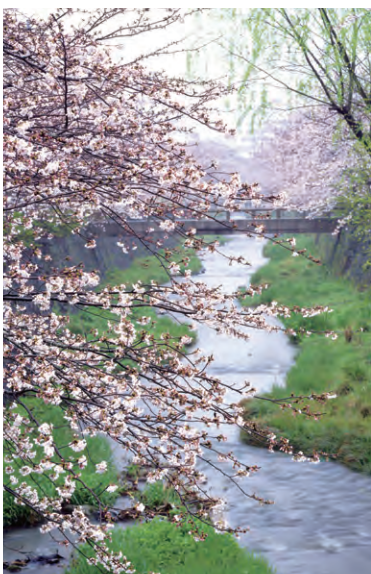
に厳しい言葉も浴びせられ、刺激や共感も感じながら過ごした山口での新人時代……。五年間を過ごした後、東京へ転勤となったが、以後しばらくは、不安を抱きながらカメラの前に立っていたという。

「突然、ケタ違いに多くの人が見ている番組を持たされて、怖くなってしまうんです。誰に向

かってしゃべればいいのかわからない。山口では、カメラの向うにいる人々の顔が見えていたのに、東京からの全国放送ではそれが見えなくて……」

不安な日々を支えたのは、転勤後もなお山口から寄せられ続ける激励だった。「落ちこんで山口に電話して『もう(山口に)帰りたい』と泣き言を言ったことも

ありましたが、『東京で頑張るんさい』『楽しみに見ちよるよ』って励まされて……。おかげで、この人たちにいい番組を届けたい、と思えるようになり、自然体でテレビに出る勇氣や動機がつかめました。だから山口は、私のいわば第二の故郷であり、原点でもあるんです」





「ここ、いいでしょう?」

## 小野文恵セレクト、 山口観光コース

### 故

郷であればもちろん、  
お気に入りの場所やモ  
ノもいろいろある。

「山口市内には、見どころがたく  
さんありますが、なんといつて  
もまず、瑠璃光寺五重塔ですね。  
塔の美しさもさることながら、  
あの空間が好き。なんだか温かい  
空気が流れていて、時間が止まっ  
たような、ゆったりとした気分にな  
れるでしょう?」

瑠璃光寺五重塔は、山口市中  
心部に建つ名塔。室町時代に周  
防・長門の二か国現在の山口県  
をはじめ、周辺各国をも治めた  
西国一の守護大名・大内氏のもと  
で花開いた大内文化のシンボル  
といわれている。

高さ三十一・二メートル、檜皮  
葺の屋根の重なり・反り具合が  
独特で、周囲の山々や木々の色、  
前方の池とも調和し、四季折々に  
美しい。法隆寺(奈良)、醍醐寺  
(京都)の五重塔とともに日本三  
大名塔の一つに数え上げられて  
いる。司馬遼太郎氏は『街道を  
ゆく』で「長州は、いい塔をもって



※1 司馬遼太郎『街道をゆく1 甲州街道 長州路ほか』  
1978年、朝日新聞社  
※2 五木寛之『百寺巡礼 第八巻 山陰・山陽』  
2005年、講談社

いる」と称え、五木寛之氏も『百  
寺巡礼』で「この塔が持っている  
『強さの美』と記している。『こ  
こ、いいでしょう?』って、よく  
いろんな人を案内しました」と、  
小野さんの声も弾む。

春は、桜。  
夏は、祭り。  
秋はお酒に高揚：  
いや、紅葉。  
冬は、温泉。

瑠璃光寺五重塔からほど近い、  
一の坂川も小野さんのお勧めス  
ポット。小さな流れに沿って春  
は桜が咲き誇り、川面に浮かぶ  
花びらからも風情を感じ取れる。  
そして、初夏にはゲンジボタル  
が舞い、「ほたる観賞の夕べ」が  
催される。国の天然記念物・ゲ  
ンジボタルの乱舞を楽しみなが  
らコンサートなどで盛り上げる  
市民参加型のお祭りだ。

「山口の人って、参加型のお祭  
りが好きだし、それを催すこと  
が得意なんだと思います」と、  
小野さん。やはり一の坂川周辺  
で、毎年十月に開催されている  
市民手づくりのイベント「アー  
トふる山口」についても、「わ  
かるなあ。楽しいことを仲間と  
一緒に作っていきたい。虫」を  
飼っている人が、山口には多い  
ですね。私もそういうことに  
手を出したくしょうがない  
たちだから」と、今ではそれら  
に参加できないことが、残念で  
ならない様子だ。☑

魅力なんです。華やかなクライ  
マックスだけではなく、『ああ、  
終わっちゃったあー』っていう  
感慨、宴の後の寂しさまでひっ  
くるめた快感がエンターテイン  
メントの魅力だと思うし、それ  
への執着が、番組を作っていく  
心ともつながっているのかもしれ  
ません」

生き生きと語る横顔からは、  
明るさ、楽しさの奥に秘められ  
た小野さんの感性や情熱が見て  
取れた。

湯田温泉で  
気軽にほっかり、  
山頭火の句に酔う。

祭りと並ぶ小野さんの好物  
(?)は、お酒。ただし、一人で  
飲むのではなく、みんなとワイ  
ワイ語り合いながらの「飲ミユ  
ニケーションが好き」と笑う。  
秋から冬へと熱かんのおいし  
さが身にしみる季節には、温泉  
とのコラボ(?)もたまらない。  
山陽道随一の名湯といわれる湯  
田温泉の存在も、おいしいお酒  
とともに、小野さんの山口時代  
をほっかり、温めてくれたよう  
だ。「市内の中心部近くだから、



## 小野文恵の 山口歳時記



ふらっと立ち寄れて、湯上がり  
のそぞろ歩きでは、山頭火の歌  
碑にニンマリしたり…」  
「漂泊の俳人と呼ばれる種田  
山頭火(一八八二〜一九四〇)は、  
山口市のお隣・防府市出身の自  
由俳人。山口市内には其中庵  
や風来居と名づけた庵を結んだ。  
湯田温泉街に立つ歌碑には『文  
頭略』：おそそも湧いてあふれ  
る湯」と自筆で刻まれている。  
「山頭火、好きですね。ときど

ゆるやかな故郷の  
雅びを伝える  
技と味、  
大内人形&外郎

き句を引用して話すこともあり  
ます」という小野さんのお好み  
の句は、「捨てきれない荷物の  
おもさまへうし」。

お祭り、大好き。  
そして、  
宴の後の寂しさも。

「大のお祭り好き」を自認する  
小野さんにとって、とりわけ思  
い出深いのは、毎年七月に開催  
される山口祇園祭だ。その中日  
に行われる市民総踊りでは、列  
に加わって踊ったとか。

「おうちの、おとのさま」  
て、確か、こういう振り付けで  
したよね」

音頭を口づさみながらのボー  
ズもビタリ、決まっている。  
「体が覚えていきますね、お祭り  
体質なんです」(笑)

「そうだった大がかりなお祭  
りももちろん楽しいけれど、手  
作りの祭りも大好き」と小野さ  
ん。たとえばお気に入りの酒屋  
に集まった有志が力を合わせ、  
南アフリカのバンドを呼んで催  
したイベントの興奮は今も忘れ  
難いという。

「お祭りやイベントって、それ  
ぞれ始まりがあって、盛り上が  
りがあって、そして、終わって  
いく…その一連の流れ、幕が上が  
って降りるまでの全てが☑

今や、全国区の期待という荷  
物を背負っている小野さんだが、  
その重さに耐えつつ元気に活躍  
していくために、心身のリフ  
レッシュを欠かさず、暮らしの  
中での季節感も大切にしている。  
「雛祭りには、山口の大内人形  
を飾ります。東京への転勤が決  
まったとき、小さな一對をいた  
だいたので、それからは毎年、  
飾っています」

大内人形は、山口で京を模し  
たまづくりを進めた大内氏  
二十四代弘世(一三〇八)が、  
都から迎えた妻を慰めるために  
作らせたと伝えられている男女  
一對の人形。山口の伝統工芸・  
大内塗の製品の中でも代表的な  
存在だ。大内塗は、大内氏の時  
代に中国や朝鮮との交易上、重  
要な輸出品のひとつであったと  
いう。「大内朱」と呼ばれる渋い  
朱色の色漆や優しい面立ちが、  
西の京・山口のイメージとも重  
なり、雛人形としても人気だ。  
「眺めていると穏やかな気分にな  
ります。それから、山口の外  
郎もあっさりとした品味わいが  
いいですね。山口に行くといつ  
も買って帰ります。私にとって  
山口は『ゆるやかな故郷』、大  
内人形も外郎もそんなイメージ  
にぴったり、重なります」

●観光に関するお問い合わせ  
山口市経済部観光課 TEL083-934-2810  
山口市観光案内所 TEL083-933-0090  
http://www.city.yamaguchi.lg.jp/kanko/org/

瑠璃光寺五重塔



大内文化がはぐくんた  
「来る者は拒まず」。

山口人に、乾杯！



## 確

かに今の山口にはゆるやかという言葉が似合う。だが、大内氏二十四代弘世から三十一代義隆（一五〇七―一五五二）までの約二百年間、朝鮮半島や明との貿易によって莫大な財を成した当時の街の印象は、ゆるやかというより華やかだったはずだ。都をはじめ各地から多くの文化人を受け入れ、まさに「西の京」の別名にふさわしい賑わいを見せていたという。足跡を残したのは、連歌師の宗祇、画僧・雪舟、そして、宣教師フランシスコ・サビエル。市内には、宗祇の歌碑（八坂神社）や常栄寺雪舟庭、サビエル記念聖堂など、ゆかりの地が点在している。

山口赴任中の小野さんは、それらの名所からの中継も担当した。「山口の自慢の場所を全国に紹介することに燃えていました」とほほえみ、続けて「やっぱり一番印象的なのは、人。温かく対応してくれた地元のみなさんとの出会いが私の一番の宝物です」と、きつぱり。

「よそ者の私が『あなたはこまで』って扉を閉ざされたことは一度もありませんでした。失敗続きの私を優しく受け入れ、育ててくれた。山口には、外からやって来た人を擁護し、育てようという土壌があるようです。もしかしたらそれは、大内氏の時代から人々に受け継がれている気質なのではないか？」

とかく保守的とみられがちな山口だが、「決して排他的ではなく、むしろ『来る者は拒まず』というおおらかさを感じます」と、小野さん。



「山口は、雪だるまの芯」。  
進化を続ける故郷に  
愛を込めて贈る言葉

## さ

らに、ハラハラ、ドキドキな五年間を経て東京転勤が決まった当時を思い出し、

「誰からも『行かないで』とは言われませんでしたね。『行け行け、東京で頑張って故郷に錦を飾れ』って背中を押されたようで、『去る者は追わず』という一面も感じました」と、笑う。

「子の活躍を願う親心めいていて、しかも、太っ腹。その懐の深さは、大内文化の遺産のような気がします。山口の人々の心には、豊かな文化が花開いた街ならではの誇りや自信が受け継がれ、秘められているのかもしれないね」

温かな激励に送られて、山口を後にした小野さん。その後のめざましい活躍ぶりは、衆知のとおりだ。そして、その様子を喜んでいる人たちが、山口には今もたくさんいる。

「本当に有り難いことです。私にとつて山口は、雪だるまの真ん中、最初に丸めた玉のような存在です。受け入れてくれる人たちがいた、という喜びを核にして、この雪だるまをどんどん大きくしていきたい！」

山口の街もまた、大内文化という歴史を核としながら年々新しい変化を加え、豊かさを増してきている。たとえばメディアアー

トの発信基地・山口情報芸術センター（YCAM）は、アーティストが山口に滞在しながら作品を作っていく手法なども取り入れた、新しいタイプの複合文化施設だ。

「よそから来た者を受け入れ、新たな文化を作っていくという気風」に合った施設ですね。私の赴任中にこれがあつたら、通いつめていたでしょうね」と小野さん。その口調には、故郷の発展を喜ぶ温もりがあつた。

昨年大晦日のNHK紅白歌合戦で、小野さんは飛行船からの中継を担当した。

「飛行船から地上を見下ろすと、崇高な気分になりました。人間の営みはささやかなことかもしれないけれど、それだけに愛しく、受け継がれていくことの尊さも感じられて……」

歴史も気風も、人々が生き、過去の遺産を守りながら進化を取り入れ、未来へと受け継いでいくもの。そして、そこに個性がみえれば、人々を魅了するに違いない。山口には、それがある。

小野文恵さんから第二の故郷・山口へ、愛を込めて贈られたメッセージの数々は、そんな確信を与えてくれたのだった。

山口には、外からやって来た人を擁護し、育てようという土壌があるようです。もしかしたらそれは、大内氏の時代から人々に受け継がれている気質なのではないか？



### ●プロフィール

#### 小野文恵（おのふみえ）

NHKアナウンサー。日本語センター所属。広島県府中市出身。一九九二（平成四）年にNHK入局後、初任地の山口放送局に赴任。一九九七年までの五年間在籍し、東京アナウンス室に異動。現在、「ためしてガッテン」「鶴瓶の家族に乾杯」「土曜スタジオパーク」などの司会を担当。二〇〇四年、二〇〇八年には「紅白歌合戦」の司会も務めた。





# つながる！ Yamaguchi-ing ひろがる！

室町時代、芸術文化について  
深い理解を示した大内氏。  
その精神は今もこのまちに息づいています。  
豊かな歴史、芸術文化をまちの個性として生かし  
誇りをもって次世代に伝えていこうと、  
人々の熱い思いがまちを盛り上げています。



## 懐かしい風景、出会いを探しに アートふる山口

地域の人々と触れ合いながら、  
気軽に「西の京・山口」のまち並み  
を楽しんでもらおうと十四年前  
から始まった「アートふる山口」。  
地域に暮らす人々を中心とした  
ボランティア組織の実行委員会  
によって企画・運営される参加型  
のイベントで、毎年十月、県内外  
から約七万人が訪れています。  
メインの会場となるのは、一の  
坂川、堅小路周辺。この地域には、  
国宝・瑠璃光寺五重塔や龍福寺

といった大内氏ゆかりの歴史的  
建造物が多くあり、川沿いには  
春は桜が咲き、初夏にはホテルが  
舞う、四季折々の風情が漂って  
います。小さな路地に迷い込めば、  
間口が狭く奥行きが広い「町屋」  
や、格子や虫籠窓の美しい古民家  
など、昔懐かしい情緒あるまち  
並みが、訪れる人をやさしく迎  
えてくれます。

イベントの目玉となるのは「小  
さな美術館」。民家やお店約一〇〇  
軒を手作りの小さな美術館に  
見立て、代々伝わる書や絵画、工  
芸品などが展示されます。風情  
あるまち並みをゆっくり散策し  
ながら、地域に住んでいる人たち  
と触れ合い、懐かしいお宝に出会

えるという盛りだくさんの内容  
です。各ステージでコンサートが  
行われるほか、ワークショップや  
体験イベントなど、子どもから  
大人まで楽しめるイベントも目  
白押しです。実行委員長の内山  
秋久さんはこう語ります。

「地域の人々が参加して、一体と  
なって作り上げるイベントとし  
て、毎年さまざまな趣向を凝ら  
してきました。現在、年間通して  
活動を行っている登録スタッフは  
約八十名。地元の人々を主体に、  
イベント・展示参加団体、高校生  
や大学生を含む一般ボランティア  
など、幅広い顔ぶれです」



## まちおこしからまちづくりへ

アートふる山口がきっかけと  
なり新たな取り組みも行われて  
います。井上馨や伊藤博文など  
著名人にも親しまれた元料亭の  
『葉香亭』や、明治維新の幕開けに  
大きな役割を果たした『十朋亭』  
の保存活用運動は、実はこのイベ  
ントが発端。アートふる山口での  
一般公開が契機となり、署名活動  
などを行った結果、まちの財産と  
して保存することができました。

昨年は、地域からの発案で、山口  
が発祥の地とされる『箏曲組歌』  
の再現も実現しています。  
「古民家を再生した若者感覚の  
店も増え、この界隈の散策を楽  
しむ人の流れもできつつありま  
す。少しずつですが、人々の手づ  
くりの企画で、まちおこしからま  
ちづくりへと、着実に変化を見せ  
てきていますね」





## 未来に向けてつながる思い



「アートふる山口にける原動力は？」との問いかけに「毎年人との触れ合いが楽しみ。イベントを通じて、まちの素晴らしさ、人の素晴らしさを実感することができました」と瞳を輝かせながら熱い思いを語ってくれた内山さん。その思いは、未来へとつながっています。

「地元の人々にもっとふるさとについて知ってもらい、山口ってこんなにいいところなんだと誇りに思ってもらいたい。人の元気は、まちの元気。一番の財産は『人』なんです。これからも人とのつながりを大切にしながら、まだ見ぬまちの魅力を掘り起こし、次の世代

に守り、伝えていきたいですね」古き良きものを守りつつ、新しい文化を生み出していく。アートふる山口は、人とまちの魅力によって多彩な輝きを放ち、新たなステージへと進化しています。



## 受け継がれる伝統文化 山口鷺流狂言



地域の人々による新しい文化活動が始まる一方で、古くからの伝統文化も大切に守られています。その一つが「鷺流狂言」です。江戸時代、大蔵流・和泉流と並び、隆盛を誇っていた鷺流狂言。現在、分家の鷺伝右衛門派の流れを汲む鷺流狂言が伝わっているのは、全国でもここ山口のみ。市民の力によって今日まで大切に保存・伝承されてきました。

言葉からは伝承者としての意気込みがひしひしと伝わってきます。「秋の定期公演には六〇〇名近くの方が集まります。毎年足を運んでくださる皆様、関係者の支援のおかげで今日まで続けることができました。狂言に楽しく触れてもらおうと、市内小中学校での上演も行っています。体験を通して、山口の伝統文化に親しみ、関心を深めてもらえればうれしいですね」その穏やかなまなざしの先には、伝統文化に対する誇りと熱意が感じられました。

毎週土曜の夕方、大殿大路にある「山口ふるさと伝承センター」には、高校生や社会人、主婦など、さまざまな顔ぶれが集まっています。ここで行われているのは「山口鷺流狂言保存会」による伝習会。県指定の無形文化財技術保持者である小林栄治さんと米本文明さんを中心に、十五名の伝習生による稽古が行われています。その姿は真剣そのもの。

ピンと張りつめた空気の中、せりふの一つひとつや声の出し方に神経を集中させた、熱のこもった稽古が続けられます。「山口鷺流狂言の芸風は、やわらかく品格があるのが特徴。独特の緩急をつけたせりふや動きがあり、演じるには高度な技術を要します。正確に保存・伝承していくことに、重大な責任を感じています」と語る米本さん。その



## 全国でもまれな地域メセナ活動

## 山口メセナ倶楽部

こうした芸術文化活動を継続させていくには、市民の努力や協力はもちろん、金銭的なサポートも欠かせません。それを陰で支えているのが「山口メセナ倶楽部」です。山口メセナ倶楽部は、行政や一企業が拠出するメセナとは異なり、個人や企業など複数会員が毎月一万円の会費を納めて、地域の芸術文化活動を支援しているのが特徴です。この

ような形での芸術文化支援は非常に珍しく、地域に根ざした山口市ならではのメセナとして、全国から注目されています。

十五年間で助成の対象となった文化事業はなんと二六〇件、金額にして四九〇〇万円にも上ります。例えば、先述したアートふる山口には、これまでに三七五万円、鷺流狂言には四五万円の助成を行っています。こうした支援がさま

ざまな地域文化、芸術活動の実施、継続に大きく貢献していることは言うまでもなく、地域の芸術文化活動を支えるかけがえのない存在となっています。芸術文化をまちの個性として高めていくこうとする「人」と、その活動を支えていくこうとする「人」。室町時代からこのまちに脈々と受け継がれているのは、歴史や芸術文化といった形あるものだけでなく、その財産を守りながら、新しい文化をはぐくみ、未来へと伝えていくこうとする、人々の熱い心意気のようなものです。

※メセナとはフランス語で芸術文化支援の意味。

### 【インフォメーション】

#### 第14回 アートふる山口

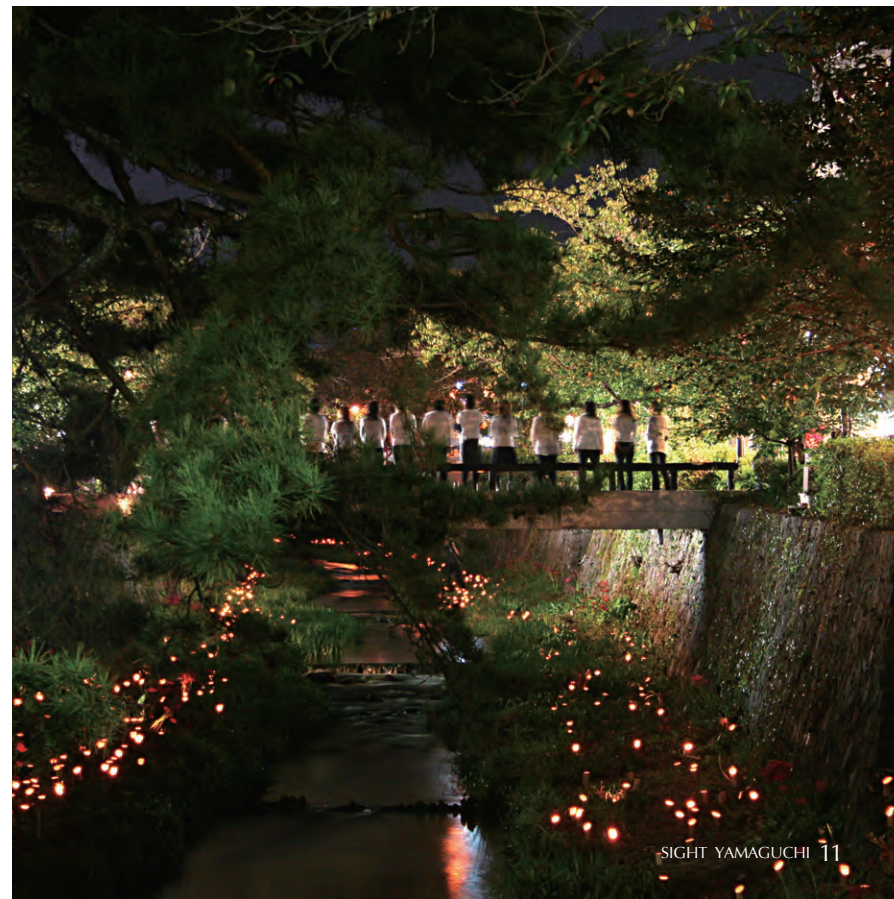
◎開催 日/10月3日(土)・4日(日)  
◎会場 /一の坂川・豎小路周辺  
◎お問合わせ /アートふる山口実行委員会事務局  
(大路口ビー内) TEL:083-920-9220  
<http://www.artfull.gr.jp/>

#### 山口鷺流狂言保存会 結成55周年記念公演

◎開催 日/10月10日(土)  
◎会場 /野田神社 能楽堂  
◎お問合わせ /山口鷺流狂言保存会事務局  
(山口市教育委員会文化財保護課内)  
TEL:083-920-4111

#### 第14回 全国メセナネットワーク会議

◎開催 日/10月2日(金)・3日(土)  
◎会場 /ニューメディアプラザ山口 ほか  
◎お問合わせ /山口メセナ倶楽部(山口商工会議所内)  
TEL:083-925-2300  
<http://www.yamacci.or.jp/mecenat/>





# はじまりの場所

「平川 和明」さん＋「溝内 健吾」さん



同じ夢を持つ仲間と  
過ごした学生時代

長崎出身の溝内さん（右ページ）  
写真右と福岡出身の平川さん  
同写真左。彼らがこの地に移住したのは今から十年前、大学進学がきっかけでした。年が同じこともあり、プライベートでも時間を共にすることが増えていった二人。

「大学でプロダクトデザインを勉強するうちに、デザインよりも実際にものをつくることへの興味が増していきました。よく仲間が集まっていた、こんなことをやってみたい、面白いことをしてみたいと将来の夢を語り合っていましたね」

卒業後、平川さんはフィンランドへ二年間留学し、本格的に家具のデザインや製作について勉強し始めます。帰国後は、籍をおいていた大学院に復学。昼は木工所で働きながら技術を磨き、夜間は学校で勉強に励むという生活を続けました。一方の溝内さんは、卒業後、市内の工務店でアルバイトをする傍ら、オリジナルの家具や小物を製作する模索の日々を過ごしていました。活動は別々に行っていたものの、互いに「ものづくりで生きていきたい」という思いは日に日に高まっていき、やがて二人は、山口で家具職人として一緒に歩むことを決意。無垢材を使った家具づくりに本格的に取り組み始めます。

周囲の温かい  
サポートを受けて

自分たちがつくった家具や  
小物を販売するには、常設



彼らが手掛けるのは、カッコよさや見せかけではなく、長く使える実用性のあるもの、暮らしにすっとけ込むシンプルなものを中心。そのものづくりから浮かんでくるのは「誠実」という言葉。一つひとつ丁寧に作られた木の家具や小物からは、2人のものづくりに対する真っ直ぐな姿勢が伝わってくる。



場所が必要だと考えていた二人。そんな折、地元の人と知り合ったことがきっかけで、偶然知ることとなったのが、NPO法人山口まちづくりセンターが進める町屋再生事業でした。「しつとりとした古民家の雰囲気」に、自分たちの家具も調和するはず「そう考えた二人は、再生された町屋を借りることを願ひ出ます。当時は振り返り、平川さんはこう語ります。

「店を構えたいという情熱はあっても、具体的には何をどうしていいのか、右も左も分からない状態。そこで、親身になって相談につてくださったのが、山口まちづくりセンターをはじめとする地元の方たちでした。まわりの人々に応援してもらっている、温かく迎えてもらえるという感触が不安を打ち消し、ここに店をオープンするんだという決意へとつながっていきました」

こうして二〇〇五（平成十七）年、オリジナル＆オーダーメイドの家具屋「LB Furniture works」がオープン。もともとあった古い梁や柱を生かした店内には、彼らのセンスが光る無垢材のテーブルやイス、小物がバランスよく配置され、店全体のやさしい雰囲気をつくりだしています。

地域との  
つながりを広げたい

二人が店を構えたのは、通りから少し入ったひっそりとした場所でした。

「静かな場所なので一人ひとりのお客様とじっくり向き合えます。オーダーメイドの際の打ち合わせもしやすいですね。商品をじっくり見ていただくにも最適な場所だと思います」と平川さん。

二人の家具は口コミで知られるようになり、徐々にファンやリピーターも増えてきています。そうした中、溝内さんは一昨年に同窓生と結婚。新たな人生のスタートを切りました。

「山口はまちのサイズが手頃で、とても住みやすいところ。徒歩や自転車圏内に必要なものが揃っている、こじんまりとした雰囲気が好きですね。時間の流れもゆったりしています。ちよつと足をのばせば、海にも山にも行ける。自然の恵みがコンパクトに詰まったところも魅力です」

これからの展開について二人はこう語ります。

「家具を通じてたくさんの人に出会いました。仲間との出会い、人との出会いに支えられて今があります。今後は定番商品を増やしつづ、子どもたちを対象にした木工教室や同級生たちとの企画展示など、新たな展開も考えています。人々との触れ合いを通じて、地域を盛り上げられるお手伝いができればいいなと思います。まだまだやりたいことはたくさんありますね」

平川和明さんは平成十七年三月「第四回やまぐち新進アーティスト大賞（奨励賞）」を受賞されました。

山口市の中央を流れる一の坂川一帯には、西の京を感じさせる

風情あるまち並みが今も残されています。近年、この古き良きまち並みに

魅力を感じる若者が増え、

空き家を再生させた

おしゃれな店舗が次々に生まれています。

その先駆けともいえるのが、

木製家具の店「LB Furniture works

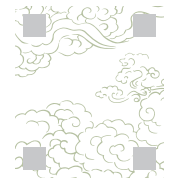
（エルビー・ファニチャー・ワークス）」。

平成十六年度の町屋再生事業※1で改修され、生まれ変わった町屋です。

オーナーは三十歳になる平川さんと溝内さん。

二人はどんな思いでここに移り住み、

店をオープンさせたのでしょうか。



7538790



山口中央局承認  
2034

差出有効期間  
平成22年3月  
31日まで

切手を貼らずに  
お出しください

フリガナ  
●お名前 (必須) ●性別 (男・女)

●ご住所 (必須) 〒 -

●TEL (必須) ●FAX

●年齢 歳 ●ご職業



LB Furniture works

※1 大内文化特定地域内に残る空き町屋を再生・活用して、風情ある町並みづくりに生かそうという試み  
※2 山口市が実施する芸術家育成支援事業で、旺盛な制作意欲を持ち、創造性豊かな将来性あるアーティストに贈られる賞。  
受賞者は、受賞の翌年度にワークショップ等の地域貢献活動と展覧会を開催する。



Present Quiz  
**プレゼントクイズ**

「彩都山口」をお読みいただいた方に、  
感謝をこめて山口銘菓「外郎」をプレゼント!  
ふるってご応募ください。

**Q** 巻頭特集で小野文恵さんが必ず  
お客さんを案内する場所として  
オススメの、山口の見どころは次のうちどれ?

- ①法隆寺五重塔
- ②醍醐寺五重塔
- ③瑠璃光寺五重塔



抽選で  
5名様に「外郎」  
プレゼント!!

《応募方法》

右下の専用ハガキを切り離してお送りください。

1次応募締切●2009年9月30日(水)

2次応募締切●2010年2月28日(日)

Webサイトでもアンケートにお答えいただけます。

<http://www.city.yamaguchi.lg.jp/sight/>

彩都山口「読者アンケート」をクリック!!

[個人情報利用の目的]

ご応募いただいた際の個人情報、誌面の参考とプレゼント賞品の発送のみに使用致します。

編集後記

『彩都山口』創刊号、いかがでしたか。山口市初の市外向け情報誌では、過去から現在、そして未来へと受け継がれていく“西の京・山口”の魅力の源を探ろう、と大内文化特定地域を特集しました。巻頭のゲストとしてお迎えした小野文恵さんからも“第二の故郷・山口”へのあたたかいエールをいただき、感謝しております。“住んでよく、訪れて楽しい”山口の魅力が誌面から少しでも伝われば幸いです。

今後、皆様からの声を反映させた誌面づくりをしていきますので、どうぞ創刊号を読んでのご意見・感想などをお寄せください。お待ちしております。

伝統から未来を彩る【西の京】情報誌



●創刊号(2009年3月)

●発行

山口市総合政策部  
企画経営課

TEL.083-934-2911

FAX.083-934-2642

企画制作 株式会社 コア

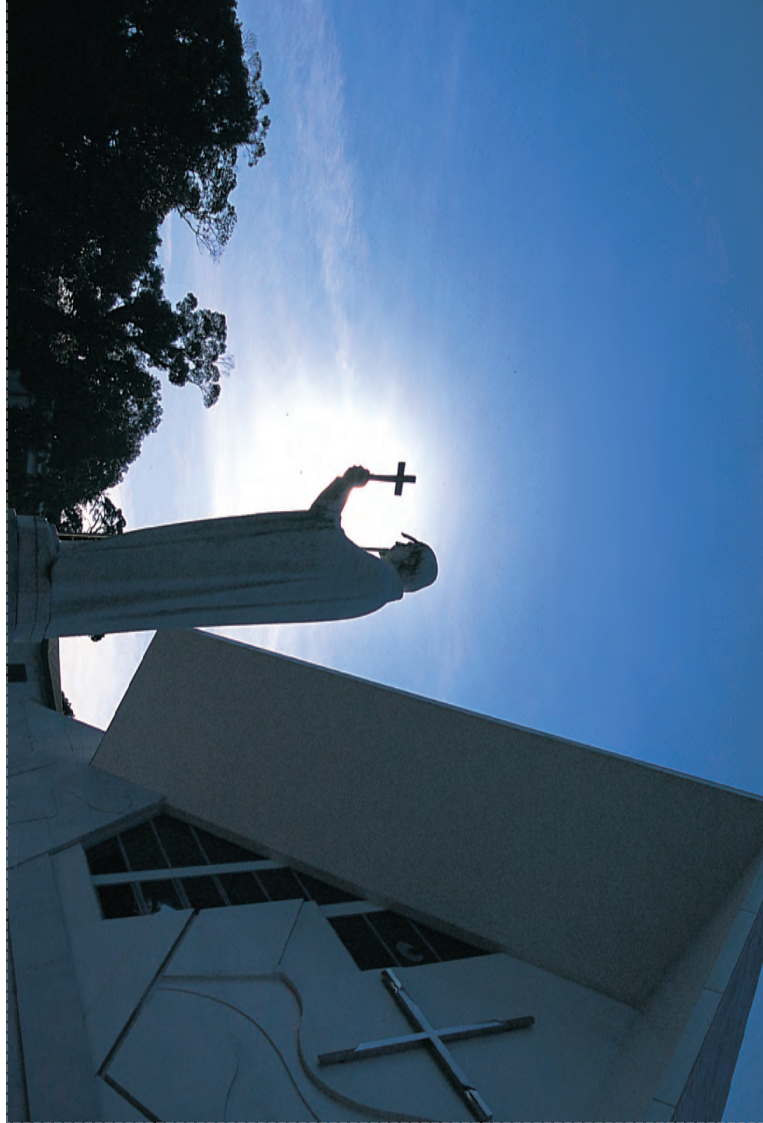
Editor/編集 矢原 玲子

Writer/取材 村上 郁子

小野 理枝

Art Director/デザイン 弘岡 紀夫

Photographer/撮影 蔵澄 秀昭



このハガキで「彩都山口」プレゼントクイズにご応募いただけます。

郵便番号、住所、氏名、年齢、性別、電話番号、アンケートの回答をご記入の上、お送りください。正解者の中から**抽選で5名様に山口銘菓「外郎」**を差し上げます。当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。

●クイズの答え

「彩都山口」創刊号の感想をおよせください。

皆様のご意見を今後の誌面づくりの参考にさせていただきます。

**Q1 「彩都山口」をどこで入手されましたか?**

- 1. 郵送で 2. イベントで [イベント名: ]
- 3. 友人、知人から 4. 公共施設やホテル等の宿泊施設
- 5. インターネットで 6. その他 [具体的に: ]

**Q2 どの記事が面白かったですか?**

- 1. 巻頭特集 2. 第二特集 3. Live in 山口 4. 外郎
- 5. その他 [ ]

**Q3 山口市のどんなところに興味がありますか?**

- 1. 歴史 2. 自然 3. 文化・芸術 4. 温泉 5. グルメ
- 6. その他 [ ]

**Q4 山口市の中でどこか訪ねてみたい場所がありますか?  
訪ねてみたい理由があれば、それも教えてください。**

- 場所 [ ]
- 理由 [ ]

**Q5 今後、どんなテーマの記事を読みたいですか?**





# 外郎

う い ろ う ● U I R O



ぽっかりあいた時間、おいしいお茶に合う上質な甘味が一口欲しい...と思ったときには、山口の外郎がお薦め。ほんのり淡い小豆の風味、ぶるんとした口当たり、程よい甘さが魅力のこの外郎は、大人のおやつにぴったりです。

とりわけ印象的なのは、ゼリーや寒天にも似たぷよぷよとした食感。これは、材料に米粉だけではなく、夏場に人気のわらび餅と同じワラビ粉を使っているため、山口の外郎の一番の特徴といえます。和製ゼリーとも呼ぶたいその口当たりは、上品な甘さと合いまって、口の中で雅びなハーモニーを奏でます。その味わいは奥ゆかしく、音楽でいえばピアノシモのような繊細さをたたえています。

これぞ、西の京・山口の味。大内氏が室町時代に都をまねた街をつくり、二百年にわたって栄華をきわめ、大内文化が花開いた街。その名残を伝えるお菓子といってもよいでしょう。違いのわかる方々に、ぜひ、召し上がっていただきたいのです。



現在、山口市の各菓子店では、小豆あんのほか、抹茶、栗、夏みかん、梅などさまざまな風味の外郎が人気を競っています。また、ご家庭で外郎作りを楽しむ手づくりキットを販売している店もあります。

あれこれ試して「口福」を味わいながら、「西の京・山口」へ思いを馳せてみませんか？

